

知音（呂氏春秋）

伯牙鼓琴、鍾子期聽之。

はくが伯牙琴を鼓し、しょうしき鍾子期之を聴く。

伯牙が琴を弾くと、鍾子期はそれを聴いた。

方鼓琴而志在太山、

琴を鼓して志太山に在るに方たりては、

（伯牙が）琴を弾いて、泰山に登るさまを思い描くと、

鍾子期曰、

鍾子期曰はく、

鍾子期は、

「善哉乎、鼓琴。

「善きかな、琴を鼓するや。

「なんと上手に、琴を弾くことよ。

巍巍乎若太山。」

ゑいゑい巍巍乎として、太山の若し。」と。

高く険しいさまを表して、泰山のような感じがする。」と言った。

少選之間、而志在流水、

少選の間にして、志流水に在れば、

しばらくして、（伯牙が琴を弾いて）水の流れるさまを思い描くと、

鍾子期又曰、

鍾子期又曰く、

鍾子期はまた、

「善哉乎、鼓琴。」

「善きかな、琴を鼓するや。」

「なんと上手に、琴を弾くことよ。」

湯湯乎若流水。」

湯湯乎として流水のごとし。」と。

水が勢いよく流れるさまを表して、流水のような感じがする。」と言った。

鍾子期死。

鍾子期死す。

その鍾子期が死んだ。

伯牙破琴絶絃、

伯牙琴を破り絃を絶ち、

伯牙は琴を壊して、絃を切り、

終身不復鼓琴。

終身復た琴を鼓せず。（一部否定）

死ぬまで二度と琴を弾くことはなかった。

以為世無足復為鼓琴者。

以為へらく世に復た為に琴を鼓するに足る者無しと。

（伯牙は）事を弾いても聞かせるに値する人が、もういないと思ったからである。

【書下し練習】

伯牙鼓琴 鍾子期聴之。方鼓琴而志在太山、
鍾子期曰、

「善哉乎、鼓琴。巍巍乎若太山。」

少選之間、而志在流水、鍾子期又曰、

「善哉乎、鼓琴。湯湯乎若流水。」

鍾子期死。

伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴。

以為世無足復為鼓琴者。